

ルールを「正しく」守る

ルールを守る。正しく守る。この「正しく」ということが重要であり問題なのです。

「ルールを守る」ということの内容が、明確に理解されていないように思われますので、敢えて、蛇足ながら、「正しく」という言葉を加えました。

全てのプレイヤーは、「ルールを守っている」と言います。しかし、例えば第 15 条に係わるプレーについて、数多くのゲームを詳細に照合してみると、ルールとプレーの間に、ギャップがあります。ルールを守っていると言うプレイヤーの言動に不一致があるのは何故でしょう。その原因は、守り方即ち「正しく」守っていないことにあるのです。

「正しく」ということの意味の理解が根本問題です。ルールに従ってプレーするに当たっては、そのルールができた過程を知れば、その規定理由即ち制定意図がわかり、守ることの必要性を理解した上で、積極的に守るようになります。その認識が不足したままで、守らねば罰を科せられるという単純受動的・義務観念だけでプレーして能動的に守っていないと不完全になります。ルールに書かれているラグビー精神を具現するのだけならば、効果と意義の点で本当に守ったと言えないのです。残念ながらそのプレイヤーは本当にラグビーの楽しさを満喫できませんし、ラグビーを愛していないということに繋がっていくのです。Let's read and enjoy Laws. enjoy とは、ルールを自分のものとして、能動的に守り、ラグビーを楽しむことです。

幾つかの簡単な規則だけで、ルールの詳細を知らなくても、人の真似をするだけで結構ラグビーができます。力の発散になり、それなりに楽しむことができます。しかし、より楽しく・より強くということになれば、それだけでは不十分であることに気付くことになります。これはプレイヤーの問題ですが、その前にコーチの教えるという問題があります。だから順序・方法としては、ルールを正確に理解し教えることが第一です。そして、レフリーもレフリングに生かすことによってよい結果がえられるのです。

ルールを正確に理解するとは、「十分」ルールの意図が生きるようにすることであって、部分的であったり、表面的であっては十分とは言えません。ルールの守り方を分かり易く 3 段階にすると次のようになります。

1. ルールの意図（精神）を体しプレーしその具現に努める
2. 文字に示されたことに従ってプレーをする
3. （上記 2 項）の未消化のまま改正の言葉（言葉尻）だけのプレーをする

1.2.3.の 3 段階を充足して初めてルールを「正しく」守ったと言えるのです。プレイヤーもレフリーも 3 の段階で留まっている場合があります。

ルールを正しく守るために必要なことに、ルールブックの刷新があげられます。理解し易く、守ろうという意識が容易に湧いてくる文章にする必要があります。最近、イングランドでもこの点に非常に力を入れています。誰かがするものと思っていはいけません。必要は発明の母という言葉のとおり、ラグビーを愛する多くのプレイヤー・レフリー・コーチが、必要を感じ、そのエネルギーが結集し取り上げられ初めて成るものなのです。

ルールは、IRB（国際ラグビー連盟）で、プレーの現状の問題点と疑問点についての意見を出し合って議論して決定され、英語で各国へ回状されます。ルールブックは各国で国語に翻訳して一冊の本のように形成されたものです。英語を国語とする国では当然そのままの言葉が使われていますが、図などは全く同じというものでもありません。日本の場合は、これまでイングランドのルールブックを手本に翻訳し、いろいろと苦労を重ねられた産物です。翻訳に当たっては、ラグビーの歴史に詳しく、且つプレーを深く究め、さらに英語ないしは英文学に含蓄のある人達によって、ルールに書かれているラグビー精神を広く浸透させるという条件達成のため、苦労されてきました。

着実に前進しているイングランドとくらべてみますと、メジャー・イングランドは、昨年のいくつかの改正と試験的採用を含めて斬新な形式に変えて、ミレニアムルールブックの表紙に「THE LAWS OF THE GAME MADE EASIER」という表題を付けて出しました。普及発展に対

する強い意欲を感じました。マイナー・ジャパンはもとのままでした。この間のことについては、コラムを参照してください。

2001年に、これはさらに刷新されました。相変わらず日本はもとのままで。形式や図もそうですが、文章も堅苦しい(文語とよんでいます。「口語にするべきです」)難解なものという伝統を引きずっています。図(漫画も含めて)を多くして分かり易くすることも有意義(有効)でしょう。

IRBの改正以外に、根本的なこととして、ルールには「ローカルルール」といってその地独特の規則を決めてするのが当然且つ普通のことになっています。他の地域のチームとの試合では、共通のルールでやることは当然です。RFUにルールのラボラトリーが設置されて機能を果たしています。思い切ってローカルルールを決めて、ラグビーの普及発展に活かすべきです。勿論チームルールがあってよいわけです。他のチームとの試合のとき公式ルールでやればよいのです。

ルールブック刷新の次は、正しく「守らせる」指導法(者)の問題です。

指導者の目的は勝たせることであるのはいまでもありませんが、車の両輪のように、ルールを正しく守り、フェアであることは、絶対に疎かにできません。

指導者は主導権を持っています。信念を持ち、信頼されるコーチであることの基盤はコーチの人間性とめざすラグビーの高さにおくべきです。信頼できないコーチに教えられることは不幸です。そして日常的には上下の関係の中にも、信頼し積極的に指示に従い実践するチームは強くなるチームです。

本来、ルールを守ることと、勝つことは同根の課題なのですが、視野がせまくなり、勝利至上主義に走ってしまつて何も見えなくなつてしまつては問題です。コーチの仕事はチームを勝利に導くことであるのは間違いなところですが、ラグビーの本質に根づく良さをプレイヤーに教え、楽しくプレーをさせ、ラグビーを好きにならせるという責任が重い。だから指導者は、ただラグビーを知っている、またはプレイヤーであったというだけでは不十分であつて、ポリシーを持っていなくてはなりません。指導者としての任務を果たすために、歴史とプレーの変遷の理解、競技の本質をふまえ、合理的で、方向性誤らないことによって信頼されることが責任を果たせる条件です。そこには男女の差も、プレー経験の差もないのです。大切なのは、**豊かな人間性と熱意とロマン**です。目的達成のためのものとして、コーチングについての目標を具体的設定が必須条件です。例えば、継続ラグビーというのは、目標とはいえません。ラグビーはプレーを継続して行くものです。いかに継続するかが問題であり、継続のレベルの高さが目標になるのです。目標の浸透も課題になります。1970年代のイングランドの coaching committee の活動と coaching scheme には目ざましいものがあります。イングランドがコーチング先行時代と言われるまでに進んだ過程に注目する価値があります。コーチ認定テストや講習会を始め着実に成果をあげましたし、コーチ認定についても、方向性と指導法が日常の各コーチの指導に活かされるよう工夫されています。コーチのための研修資料の作成や、毎年の研修会が必要でしょう。

ルールを正しく守るということについての必須条件の一つとして、レフリーの努力とレフリーングの技術の向上があります。レフリーは、プレイヤーがルールを守っているかどうか監視し、反則を罰するのが役目でないことは言うまでもないところです。プレイヤーと共にルールを正しく守って、よいラグビーを創造するのが務めです。多くのレフリーが手さぐりで努力しているのには頭が下がります。しかし問題が多いのも事実です。プレイヤーであったからレフリーができるという考えは浅薄です。プレイヤーとしてどれだけラグビーそのものを理解していたかが問題です。レフリーは、プレイヤーでなくてもよいし、勿論男女を問いません。片寄ったプレーや考えを持っているプレイヤーより、無地の方が良いとも言えます。

一方、レフリーとしても心がけねばなりません。レフリーの権威を振りかざさないことは当然のことであり、ルール適用の執行官ではなく、プレイヤーと協力して、ときにはリードすることによって、よいラグビーゲームを創造する同行者としての心構えが大切です。

レフリーング向上のために、ラグビーの歴史とプレーの変遷に加えて、レフリーの変遷を特に取り上げて研究する必要があります。レフリーングの技術・要領についての勉強が必要ですし、正しくルールを守ることについて勉強不足であつては、任務を完遂できません。例えば、スローフォワードについても問題があります。コラムを参照してください。昔は、The Art of Refereeing を熟読され、信奉されました。レフリーングは芸術であることに間違いのないのですが、

RFUのマニュアルの、The tools of the trade の項目に Some will say that refereeing is an art, some a science but it is neither. Refereeing is a skill and, like any other skill, it can be taught and learnt.

芸術でなく技術ということではなく、努力すればできるものとして提示し、希望をあたえています。そして、大切な心がけとして次の3つ：

1. empathy
2. communication
3. fit

があげられています。人間性と努力が大切な要件ということです。レフリーに任せたプレイヤーとしては、レフリーの努力を認識し、敬意を持つことが大切で、十分力を発揮できなかったとき、勝敗の分かれ目をレフリングのせいにするのは慎みたいことです。

ここでも野球の話の一つとりあげましょう。

「審判員はプレイヤー、コーチ、監督、または控えのプレイヤーが裁定に意義を唱えたり、スポーツマンらしくない言動をとった場合には、その出場資格を奪って、試合から除く権限を持つ」と決められていて、暴力や暴言がなくとも、裁定に意義を唱えれば、審判に退場を宣告されるということです。規則の主旨は、審判も人間だから間違いを起こすこともある。それでも判定に従い試合を進めようというもので、野球というスポーツも、そんな人間臭い規則のもとにやっています。

ラグビーは、その発祥と普及発展の過程において、ボールを投げて・打つというという原形から発達して野球に劣らず、人間性豊かな人間くさいスポーツであることは衆知のところですが、プレイヤーも観客も、ラグビーを人間くさく楽しむことに、知恵とユーモアを働かせましょう。ラグビーの本質は思いやり豊かな楽しい競技です。

結びとして、プレイヤーも、コーチも、レフリーも、そして応援者も、「ルールを正しく守る」ということに注目し留意すれば、ラグビーはもっと面白くなります。そして、もっと多くの人々がラグビーに興味をもってくれるようになって、楽しい輪が広がることを期待してやみません。

2001.12.25
西川 義行